

紀 行

海外研修記

心優しきワーレンの人々

——コーネル大学（N・Y州）での共同研究の思い出——

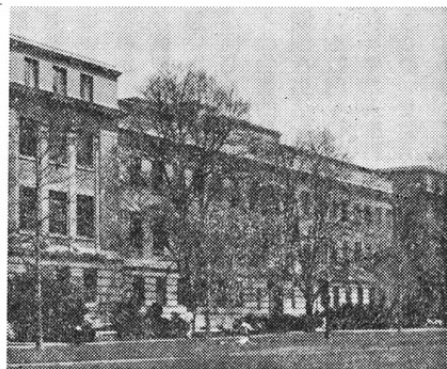
満 田 久 義

ニューヨーク、林立する摩天楼を飛びかうヘリコプターを小鳥の群れと見做す、我々アーバナイトにとって、コーネルには本生の自然と人の暖かさがあった。森と湖に囲まれたコーネル大学の美しさ、その住人コーネリアンたちの素晴らしさは、世界中の大学人が認めている。このコーネリアンがワーレンの人々は特別だと言う（ワーレンとは、私が研究生活を送った農村社会学科がある研究棟の名称）。

我々が受けた彼等の好意は、到底言葉では語り尽くせないが、感謝の意を込めて一年三カ月のワーレンでの思い出を綴ってみよう。

一、完全な受入れと研究へのあせり

一九八三年四月三日、ニューヨークのJFK空港からプロペラ機で1時間余。イサカ（トンブキンソン）空港に降り立った我々家族を迎えて下さったのは、F・ヤング教授御夫妻、C・ピーターソン教授御夫妻、そしてJ・レーモンド助手と彼の日本人の奥さんであった。花束をいただくとき我々の車は溪流を横切り、見渡す限りのコーン畑を通り、馬が駆ける牧場を横目に木立を通り抜けた。街を見下す高台にパインツリー・ロードの我が



コーネル大学のワーレン・ホール
（この4階に私の研究室があった）

家が用意されていた。その家の前庭にはブラコンのある大木が立ち、裏には丘が広がり、野生の鹿や兎が遊びに来る。日本では考えられない素晴らしい暖炉のある邸宅であった。

翌朝、コーネル大学に行くと、ビービー湖の見渡せるワーレン・ホール4階の研究室に案内され、秘書のバットさんとフランシスさんを紹介された。

言うまでもなく、コーネル大学はアイビーリーグの伝統校であり、とくに農村社会学科は世界一の研究スタッフをもっている。連日、世界中の教授たちのセミナーが開かれ、

数多くのプロジェクトが目白押しであった。

同学科長のG・エリクソン教授や発展社会学研究科長のヤング教授がわざわざ数回の会合を用意して下さり、私の研究テーマ「経済発展が農村社会構造に及ぼす影響の日本比較研究」について、いくつかの有益な助言をいただいた。当初、コーネル大学社会経済研究所のプロジェクトへの参加に興味をもった。P・エバート教授の助けを得て、ニューヨーク州の産業化が農村社会構造にどのような影響を与えるかの計量モデルを作成し始めた。しかし、図書館で1冊の本を捜すのにも1日かかり(何とひとつの図書館だけで百五十万冊もの蔵書数があり、大学全体で十六の図書館がある)、コンピュータの使用法を習得するのに数週間、何をするにも時間がかかった。当時の日記には「時間が飛んでいく、金が飛んでいく」と記している。

無数のチャンスがありながら、何の成果をもあげえないで焦っていたある日、日本農村社会研究で有名なR・スミス教授が研究室へお見えになり、私の相談を受けて下さった。そして『何よりもまず、良きパートナーを見つけることです』と励まされた。

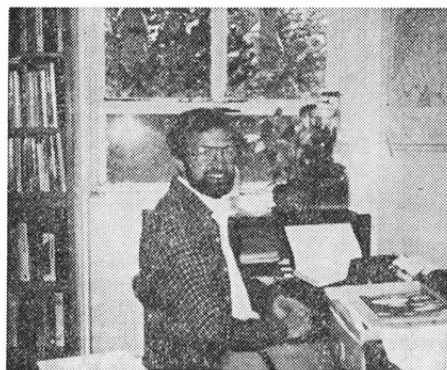
この一言でふっきた私は、連日各研究室

の戸を敲いては、自分の研究テーマと共同研究の意志をたずねた。約束の時間が全く自分の独演会だった教授。山のような論文を示し、『次回、また』と言う教授。様々であった。ともかく、毎夜、論文読みとレポート書きの連続であった。

そして、最後の最後に彼と出会った。

二、チャックとの共同研究

チャック・C・ガイスラー教授、彼はもの静かな哲学者という感じがする。毎日6時に



共同研究者コーネル大学ガイスラー教授

起床し、1時に床につくまで10時間以上も研

究を欠かさないと言われる、まるで修行僧である。彼の専門は「土地」で、アメリカで農地改革を行なおうとしている熱血漢でもある。彼はすぐ私の意図を理解し、適切な資料や論文を提示した。その頭の回転の速さ、謙虚な態度に驚くとともに、彼の研究に引きつけられた。

彼の説明によれば、米国最大の公立公園であるアディロンダック州立公園(あの国立公園最大のイエローストーンの3倍、九州の半分の広さがある)には、三千以上の湖と四千フィート以上の山々が連なっていて、「永遠の原生地」と呼ばれている。そんな奥地に今、七パーセントの勢いで人々がどんどん流入している。いったいどんな人々が、なぜ移動するのか、何もわかっていない。

直観的に、私は日本の過疎のむらの現状を思い出した。日本の国勢調査(昭和50・55年)が同じことを示唆していた。「これだ!」人々は物質的豊かさよりも、環境の快適さや人間的な生活を求めて都市から農村へ移動しているのかもしれないと興奮した。その日から我々の二人三脚が始まった。

このプロジェクトの代表、D・アリー教授によれば、この研究プロジェクトは、この地

域の開発と保全に関する政策決定を行う際、住民・自治体・同公園庁（ＡＰＡ）を助けるためにコーネル大学に作られたもので、一七カ月間、八つのチームによって実施されていた。

我々のチームは、一二〇〇名の土地所有者を対象に、人口逆流現象下における土地所有形態やその利用パターン、生活や環境の住民評価、公的政策、とくに土地利用規制に対する態度などを意識調査した。とくに、私は人口逆流は環境の快適性が主因を成すと仮定し、住民環境評価の規定要因を分析することにした。

夏休みもデータ解析と報告書作成に明け暮れていた。しかし、助手のレイモンド君やロン君の助けもあった、毎日が愉快であった。彼らの協力がなければ、私の研究は成就しなかっただろうと思っている。一九八四年六月に離米するまで、休日であっても彼らはこころよく仕事を手伝ってくれた。何回、デートの邪魔をしたことだろう。

そして、我々の研究成果は、農村社会学科より報告書として刊行された。我々が得た結論を一言ではとても言い尽くせないが、一部を紹介すると以下のごとくである。

『仮説通り、人々は環境の質、とりわけ湖

水環境に魅せられてやってきている。そして住民の湖水環境の評価は、客観的な科学測定値とは必ずしも一致せず、また、近隣環境に対する満足度や、飲料水の評価、湖水の利用満足度とも余り相関がなかった。このような従来の仮説に対して、我々の結論は興味深いものであった。湖水環境評価を規定する要因のうち、行政評価、とくに環境保全政策（土地利用規制を含む）の評価が最も有力であることが、回帰モデルを用いて定量的に明らかになったのである。』

これは新しい実証であり、世界湖沼環境会議（一九八四年八月、大津市）で発表された。

この他にも新しい住民の居住形態、すなわち、モービル・ホーム（移動住宅）と土地利用規制の問題を取りあげ、合法的な規制による階級差別のメカニズムを明らかにした。これは国際農村研究誌（オクスフォード）に掲載される予定である。

今回の共同研究での経験は、日本の調査研究では想像もできない意外なことばかりであった。例えば、車で一時間以上ぶっ飛ばしても人家どころか対向車すら見えないような調査対象地域、戸籍も住民票もない、居住者を確定するデータすらないサンプリング。これ

らは今後の国際共同研究を進める上で掛け替えない貴重な経験となるだろう。

コーネルでの研究生活で最も印象的だったのは、院生を含めて、スタッフの真摯な研究態度と凄じい研究量である。大学院のセミナーでは週に五百頁以上の講読が課せられる。ひとつの論文を書くのに数十～数百もの論文に目を通す。毎日十数時間、唯々机に立ち向う姿を見ていると、何が彼らをあのようにな異常なまでのハード・ワークに駆り立てるのであろうかと疑問に思う。

彼らは『生存』のためと笑うであろうが、私は『学問の自由』を得るためと思う。潤沢な研究費、必要ときに必要なものが得られる人的・情報資源、研究を支える諸々なサポートシステム、日本の大学とは比較にならない完備された研究環境。彼らにとっては、やりたい仕事を障害なく、常に成就しうる『学問の自由』こそが至上の価値をもつのである。その自由を求めて世界中の選ばれた研究者が凌ぎ合ひ凄じい競争社会、それがコーネルのように思えた。

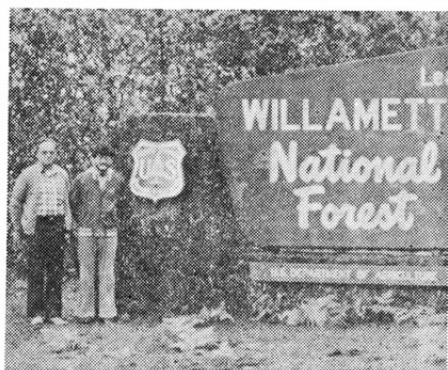
三、ユフロ国際シンポジウム

一九八三年十月十八日から十九日まで、オ

ン州ポートランドの“Sustained-Yield Forestry”をテーマとする国際シンポジウムが開催され、招待を受けた。

それに先立ち、コックス教授（サンディエゴ州立大・前米国森林歴史学会会長）からオレゴンの山村へ旅行するので同伴しないかと手紙をいただいた。彼は私が院生の頃、一七八一年京都で開催されたIUFRRO（国際森林研究機構）世界学会でポスターセッションに出していた私を激励して下さった恩人である。発表前日、彼は私とD・スミス教授（メイン大学・コーネルPh.D.）、ジュディさん（アイダホ州立歴史協会）を愛車に乗せて、カスケード山脈越えに旅立った。我々の旅は、その道の達人が最高の物を見せてくれるようなもので、正に最高の旅であった。コックス教授は米国、とくにオレゴンの山村について、いくつかの書物を著しており、日本についても造詣が深い。我々は7時の朝食から10時の晚餐まで語り合い、笑い続けた。四七〇マイル（約七五〇km）のドライブ、製材産業が衰退した過疎のむら、観光開発の町、どこへ行っても彼は我々の質問に即座に答えた。

彼らとの議論を通じて、私はダンカンのPETSモデルを山間地の過疎化過程に適用



前米国森林歴史学会会長コックス教授（サンディエゴ州立大）と伴にオレゴンの森林地帯を旅行する

することを思いついた。すなわち、日米両国の山村問題を考えるとき、人口（P）、環境（E）、技術（T）、価値・意識（S）、の相互関連に共通性が見い出せるというものである。

徹夜続きの発表準備、10時間を超える大陸横断飛行、そして人生最長のドライブ旅行。体は疲弊していたが、深夜のビール・パーティにまでつい付き合ってしまった。

シンポジウムでの発表は、コックス教授の名司会のお蔭で満足のいくものであった。彼は私が壇に上がったときには、すでに観客を

釘づけにしておいてくれたので、私は拙ない冗談が飛び出すほどリラックスしていた。この成功で、いくつかの大学でセミナーをもつことができた。

このシンポジウムの帰路、Dr.H・ヤコブ（現在ウィスコンシン大学）の配慮で東ワシントン大学でセミナーをもった。

彼はワシントン州東部とアイダホ北部の過疎地帯を案内してくれた。このような地に足を踏み入れる日本人はいないとみえる。あるスパーマーケットでは、母親が私の方を指しながら子供たちに言った。『ほら、あれがチャイニーズというのだよ。よくごらん、めったに見られないのだから』と。

四、ダウン・イーストの漁村の旅

メイン大学よりセミナーを用意したいとの申し出を受けたのは、連日氷点下20度以下の冷凍状態で冬眠していた2月であった。メイン州は米国最寒地域、しかも、「殺し屋」と呼ばれた超A級寒波のお出迎えにもかかわらず、オレゴンの旅を同行したD・スミス教授の熱烈な歓待で、二月二十五日から心暖まる一週間を過ごした。セミナーに先立ち、彼は私の他に第四紀研究所長H・ボーンズ教授と漁



メイン大学にて。DR. スミス歴史学科長兼第四紀研究所教授と共に

業経済学のジム・ウィリアム教授を伴って、メイン州海岸線ダウニーストの旅を用意してくれた。実はこの旅には、ある特別な目的があった。

コーネル大学のR・スミス教授は、一九八二年の京都大学での講演中、『アメリカには、いわゆる「むら」はない』と断言された。それ以来、私は何とか反証を見い出したかった。もちろん、中西部の大平原には「むら」はないだろう。しかし、地形的にも歴史的にも日本のむらと類似性がありそうなメインの漁村ならば、という期待があった。

漁村研究の第一人者ウィリアム教授は、私の期待を裏切らなかった。彼は氷河によって形成された自然の良港が連なるメインの美しい海岸線を東へ向った。そして、私が日本で研究した漁村と類似性を有すると思われる漁村を次々と案内し、その環境、歴史、経済、社会について詳しく説明してくれた。

ピールズ島（人口六〇〇人）は、漁業と造船だけの島である。この島にはたった五つの家系（カルバー、アレー、ステイプ、ピール、フォウルキング）しかない。権力構造も同族団のそれと類似する点もあるように思わ



真の農村社会学者カミング教授（コーネル大）とカユガ湖周辺の小さな町を調査する

れた。地先海面での年間使用権を決定するための競争や漁場争いで他地域と戦争になり、ついには船の構造まで変えた事例など、同じような事例は日本でも見い出せる。

また、イワシ加工で爆発的な人口増を経験したカナダとの国境の町イーストポートは、最盛期八〇〇〇人だったのが、今では二〇〇〇人と死の町と化している。昼だというのに人影もまばらで老人しか見あたらない。これは戦後の運輸手段の技術革新による経済立地条件の悪化が直接の原因となって生じたものである。現在、養殖漁業や石油精製に力が入れている。地域づくりのキャッチフレーズが、日本のそれとほとんど同じだったのには驚いた。

この旅を通して、私は地域ライフスタイル論の着想を得たし、また、村落構造とその機能の日本比較研究にある程度の自信を深めた。また、スキップとの愛称をもつ若くて有能な地域リーダー（メイン大学修士）とのコミュニティづくりの苦労話は楽しかった。

我々は一杯のコーヒールが飲みたくて店（よろず屋）しかなかったが入った。この冬の時期にお客がいるはずもなく、奥から出てきた女主人はコーヒーマーカーのスイッチを入れ

た。我々は棚のアップルパイを注文したが、彼女は首を横に振る。そこで別のパイを、また違うパイを注文したが、いずれも「ノー」である。ついに、ジムが理由を尋ねた。彼女曰く、『余り固すぎて食べられないよ』と。我々は笑い転げたが、すぐに背筋に悪寒が走った。この一言でイーストポートの苦悩が理解できたような気がした。

五、農家のホーム・ステイ

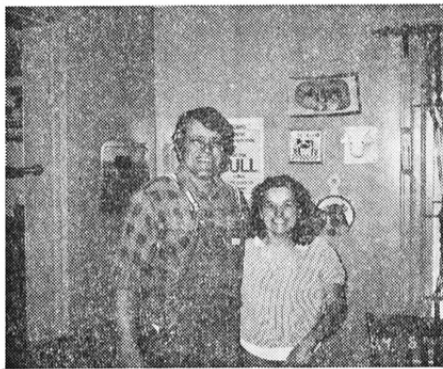
カミング教授は大の日本びいきだった。研究室がとなりのとなりであった関係で、いつも御世話いただいた。彼はコーネル大学があるフィングー湖周辺の地域づくりに直接たずさわってきた関係で知人も多かった。調査に同行した際、ひとつのお願いをした。農家のホーム・ステイである。朝から晩まで農家の人々と話し、語り合いたかった。そして、私はペンソン一家を訪問できた。

同家は八百エーカーの牧場と二五五頭の乳牛をもつ酪農家である。夫のチャールズは農業経営学専攻、妻のアンドレアは人間生態学（小児栄養学）専攻で、ともにコーネル大学を卒業している。彼らは卒業後、すぐに平和部隊としてコロンビアの中央山地に派遣され

た。アンドレアは栄養問題の民衆教育と学校給食プログラムの実施を、チャールズはコーヒーク園で小規模な酪農経営を指導した。

私が興味をもったのは、実は彼らの農業経営ではなく、彼らのライフ・スタイル、とくに家庭・家族に対する考え方であった。

周知のごとく、アメリカでは結婚する二組に一组は離婚するといわれるほどの異常さである（人口千人当り、五・二人。一九七九年）。家族崩壊は、米国最悪の社会問題だという研究者もいる。ところが、ペンソン一家には五人の子供のほか、チャールズの両親、ア



ペンソン一家との楽しい語らい

ンドレアの両親が隣接して居住している。さらに、ポーランドからの亡命一家と機械屋のアーサーも同居し、まさに巨大なホームである。

彼らとのインタビューによると、『コロンビアでの経験は、我々の人生を変えてしまった。我々の目は開かれ、人と人との思いやりや友情の尊さを知った。彼らは貧困と困難の中でこの事を教えてくれた。私たちは豊かな恵まれた環境で育ってきました。しかし、それは一時的偶然だったのです。』彼らは帰国後すぐに、全ての人々に開かれた、安全で孤立した砦を構築しようと決意した。そして、自分たちの第一子が生まれるとすぐにコスタリカから養子を迎えた。続いて、カンボジア難民の子供、ポーランドの亡命者の子供を養子として受け入れた。

アンドレアは家庭婦人であるが、地域婦人プログラムの中心人物である。また、子供の教育問題に非常に熱心な活動家である。彼女は、『我々の社会は子供を愛せなくなってしまった。子供たちは学校から帰ってすぐ両親に相談したいことがあるかもしれない。なぜ子供を育てることがつまらないことで尊敬されなくなってしまったの。我々はいく度立

ち止まってみなくてはいけない』と熱っぽく語った。彼女の生き方は、現代アメリカの過激な男女平等論や女性の社会進出論に食傷気味だった私には新鮮に写った。

ベンソン一家以外にも、多くのフィールド・プロフェッサー（在野の先生）に出会った。メインの漁村で組合づくりをやっているスキップ、オレゴンの山村で過疎対策を住民とともに考え、常にコミュニティ・ニュースを送り続けてくれるステイブ、環境問題に没頭してケープ岬に住みついたアイビー野郎、ニューヨークの喧噪をのがれ、アディロンダックで独創的な家具を創作している若夫婦。

彼らに共通しているのは、『Back to the Land（大地に回帰しよう）』思想の持ち主で、若くて高い教育を受けていること、そして何よりも強固な信条とエネルギーな情熱をもっている点である。彼らと接して農村社会に新しい明るさを見たし、コーネルでは学べなかった教訓を得ることができた。

六、これからの五年先

私は、「寄らば大樹」的な大先生に師事しなかった。しかし、ファースト・ネームで呼

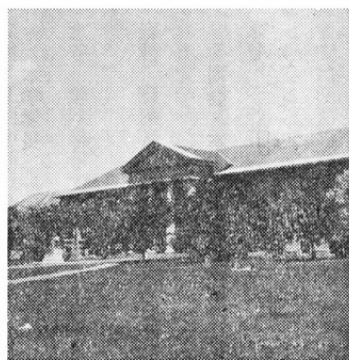
びあう多くの気鋭の教授と親交を深めた。彼らとの対話はいつも刺激的であった。

今や世界の農村社会学を主導するフレッド（コーネル大）、そして、マーチン（オハイオ州立大）とジャック（ウイスコンシン大）は環境社会学や「生命工学と社会的インパクト」といった、新しい領域を教えてくれた。ハーヴィ（前東ワシントン大、現ウイスコンシン大）は、土地利用計画と権力構造との関係を、さらにポールは私の農村の都市化理論の誤りを指摘してくれたし、ジョーは計量分析の疑問に常に答えてくれた。

彼らは私の陳腐な農村社会学の常識を払拭するに充分なパワーがあったし、農村社会学が今後ますます重要な意義をもつようになることを示してくれた。

今回の海外研修で何よりも重要であったのは、やはりチャックとの出会いであった。彼は貴重な時間をさき、常に忍耐をもって私を激励し続けてくれた。私は彼の早口の英語を十分に理解できなかったが、共同研究中は彼が言葉を発する前に、すでに彼の言いたい事が理解できるようになっていた。我々は真の共同研究者であった。

コーネルを離れる日、我々の機影が消え去



思い出のジョギングコース（創始者 E. コーネル像と中央広場）

るまで、空港の金網ごしに見送ってくれたチャックの姿を思い浮かべるとき、一年三カ月の有意義な機会に恵まれたという感謝の気持ちと、彼らと語り合った「五年先の約束」を果たすという決意で胸が一杯になる。

故郷を離れば、望郷の念は高まるものである。研究室の机の前に貼れた日本からの絵ハガキを眺めながら、いつも故郷、佛教大学のことを考えていた。

最後になりましたが、佛教大学学長水谷幸正先生はじめ、佛教大学教職員の方々、とくに社会学科の先生方に心より感謝の意を表わしたく思います。

（昭和59年8月稿）

（みつた ひさよし 社会学部助教授）